

# プロスポーツ観戦の制約要因がスタジアムにおける直接観戦に及ぼす影響

## —調整要因の媒介効果の検証—

奥 一将 (スポーツ学研究科競技スポーツ系スポーツマネジメント分野)

主査 若吉 浩二 副査 林 綾子, 吉田 政幸 (指導教員)

The effect of Constraints on Attendance Intentions in Professional Sport

: Examining The Mediating Role of Negotiation

Kazumasa Oku

キーワード: プロスポーツ観戦, 制約要因, 調整要因, 再観戦意図

Keywords: professional sports, constraints, negotiation, repurchase intentions

### 1. 緒言

スポーツマネジメント研究において主要な研究トピックの1つが観戦動機である。近年、この観戦動機とは逆の発想で、スポーツ観戦を妨げることに着目した研究が行われている。すなわち、制約要因(Constraint)に関する研究であり、概念的には人々の知覚に働きかけて行動を妨げる要因と定義される(Jackson et al., 1993)。スポーツ観戦では、チームの成績不振やチームとの関わりの低さが観戦行動を妨げると報告されているが(Kim and Trail, 2010)、観戦者の意思決定を十分に説明する段階に至っていない。本研究は、こうした先行研究に新しい理論的説明を加えるために、新たな制約要因として心理的制約と興味の欠如を加えた。

さらに、制約要因と行動の因果性にも未解明な点が多い。例えば、制約要因が行動に与える直接的な影響は検証されているものの、媒介変数を含めた間接的な影響の検証は十分に行われていない。

Constraint-Effects-Mitigation (CEM) Modelによると、制約要因は行動を妨げるだけでなく、制約を克服する過程を必要とする(Hubbard and Mannell, 2001)。これを説明する概念が調整要因(negotiation)であり、自身の周囲に存在する制約を行動に結びつけるために調整することと定義される(Jackson et al., 1993)。しかしながら、この調整要因をスポーツ観戦者の意思決定の検証に応用した研究は極めて少ない。すなわち、先行研究の問題点は、制約要因と観戦行動の関係性を、調整要因とともに明らかにし

ていないことである。以上を踏まえて、本研究は制約要因が調整要因を介して観戦行動に与える影響を明らかにする。

制約要因が行動を妨げる概念であることを考慮すると、スタジアムに来ていない未観戦者が最も制約要因の影響を受けている。そこで本研究はスタジアム観戦者(研究1)に加えて、未観戦者(研究2)も対象とした。

### 2. 研究1(対象:スタジアム観戦者)

研究1は日本プロサッカーリーグのクラブのスタジアム観戦者を対象とした。試合前にスタンド内でアンケート用紙を配布し、337票の有効回答を得た。まず、尺度のデータに対する適合度と妥当性を検証するためにLISREL8.8を用いて確認的因子分析を行った。因子負荷量、合成概念信頼性、平均分散抽出を算出した結果、すべての要因で基準値を満たした。

次に、各要因の平均分散抽出と因子間相関の二乗値を比較したところ、すべての要因で平均分散抽出が高い値を示した。よって、収束的妥当性と弁別的妥当性が支持された(Bagozzi and Yi, 1988; Fornell and Larcker, 1981)。仮説の検証には、構造方程式モデリングを用いた(図1)。観戦行動(再観戦意図と予定観戦回数)に負の影響を及ぼした制約要因は、時間的制約、知識的制約、社会的制約であった( $\beta = -.14, p < .01$ / $\beta = -.15, p < .01$ / $\beta = -.13, p < .01$ )。制約要因の調整要因に対する影響は共通する要素を持つ要因に対して有意であった(時間的制約と時間的調整( $\gamma = .44, p < .01$ ), 知識的制約と知識的調整( $\gamma = .33, p < .01$ ), ( $\gamma = .17, p < .01$ )). 再観

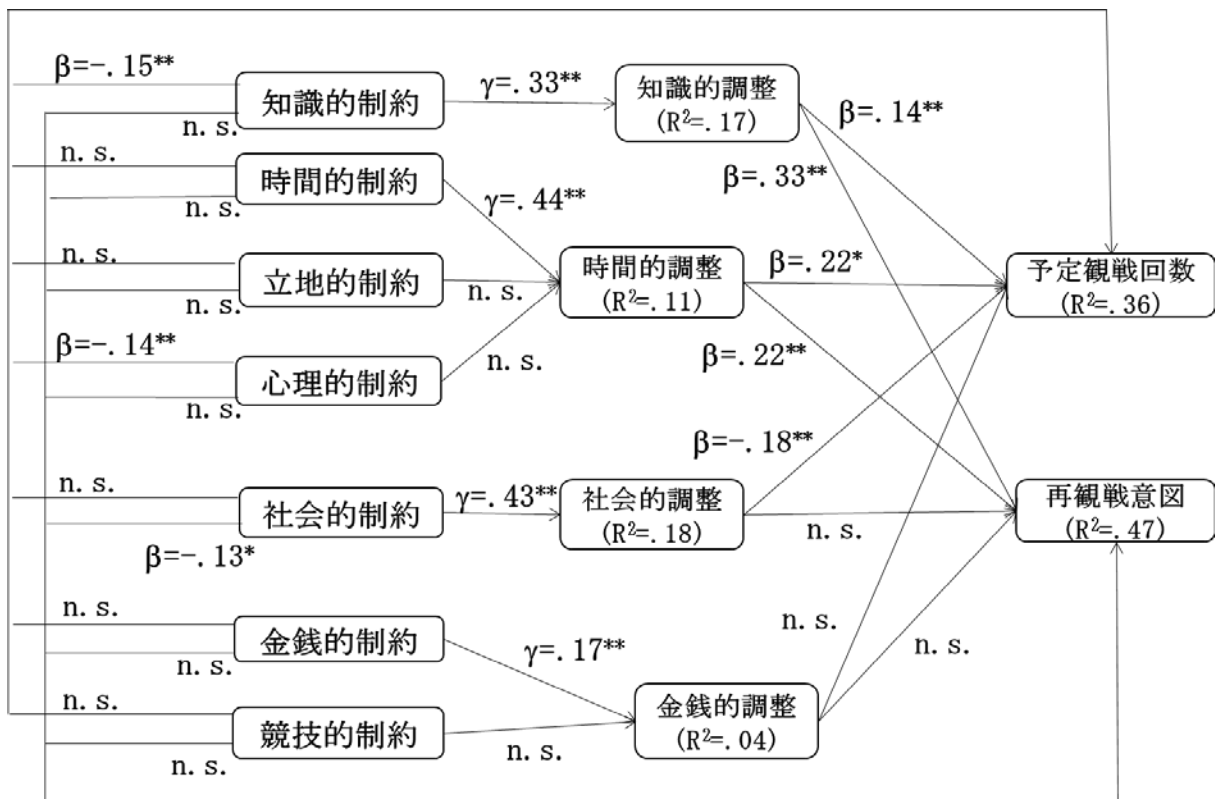


図1 本研究の仮説の検証(研究1)

戦意図と予定観戦回数の決定係数は  $R^2=.47$ ,  $R^2=.36$  であった。

### 3. 研究2(対象:未観戦者)

研究2の対象者は(1)2015-2016年度シーズンにスタジアムで試合を観戦していない者の中でも、(2)応援するチームがある者とした。17名の調査員が各自約10票を担当し、周囲の知人にアンケートを配布した。その結果、104票の有効回答を得た。尺度の信頼性を検証するために、SPSS21.0を用いて項目合計相関とクロンバックの $\alpha$ を算出した。その結果、すべての要因とその観測変数において基準値を満たした。

仮説の検証には重回帰分析を用いた、興味の欠如のみが観戦意図に負の影響を及ぼした( $\beta=-.40, p<.01$ )。制約要因と調整要因の間には、時間的制約と時間的調整の関係を除いて、研究1と同様に共通する要素を持つ要因間に有意な関係性が示された。観戦意図の決定係数は、 $R^2=.39$  であった。

### 4. 考察および結論

研究1では、本研究の尺度が概念的妥当性

を支持する結果を明らかにした。これは、制約要因と調整要因が独立した概念であることを裏付けるものである。仮説の検証では、制約要因の影響は観戦行動に対する直接的なものだけではなく、調整要因を介することを確認した。これは、スタジアム観戦者は制約を感じながらも、自らその制約を克服してスポーツ観戦に訪れていたためだと推察される。研究2では、興味の欠如が未観戦者にとって重要な制約要因であることを明らかにした。これは、未観戦者はスポーツ観戦に対する興味がないため、スポーツ観戦について考えることが少なく、制約を制約として認識していないことが関係していると考えられる。今後、本研究がスポーツ観戦における制約要因に関する研究の一助となることを期待する。

#### 【引用参考文献】

Hubbard, J. and Mannell, R. C. (2001) Testing competing models of the leisure constraint negotiation process in a corporate employee recreation setting. *Leisure Sciences* 23(3): 145-163.